歴史とくらしの情報誌　生活資料館だより

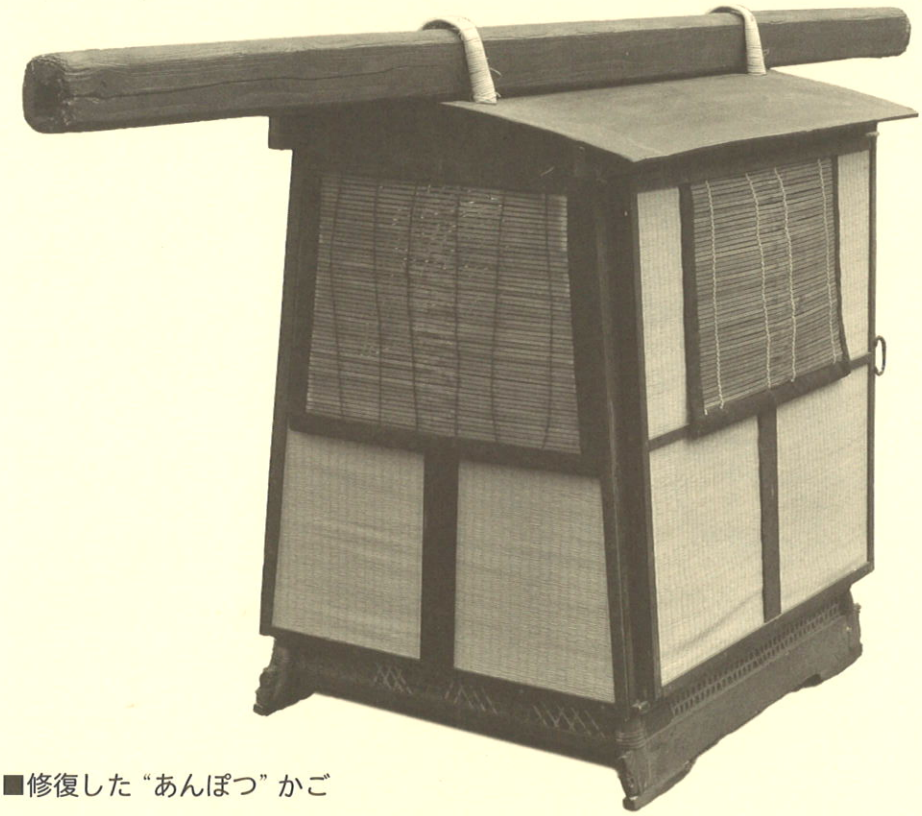
にほしま

第18号
AUG. / 2013
平成25年8月

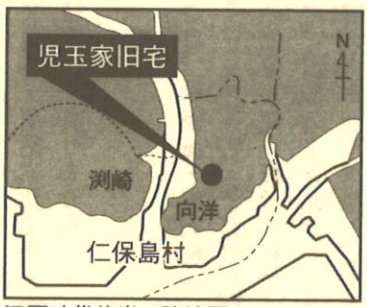
生活資料館・ハワイ移民資料館
仁保島村
〒734-0026　広島市南区仁保三丁目17-6
LIFESTYLE MUSEUM NIHOSHIMAMURA TEL&FAX 082-286-6331
ホームページ
www.nihojimamura.com

修復しました　江戸時代のかご

現代では、かごと言えばひとつのものしかイメージできませんが、江戸時代のかごは、『乗り物』というかごと、『かご』というかごの二つに分かれていました。
ちょっとまぎらわしい話です。



■修復した“あんぽつ”かご



江戸時代後半の陸地図
「わたしたちの町、広島市」の2ページ
江戸時代後半参照

「旧宅に代々伝わるかごがある、よければ資料として役立ててもらいたいんじゃが」

と、青崎2丁目の児玉英就さんから電話がありました。

聞けば、祖父が明治時代中頃まで使用していたとのこと、すぐに訪問。

向洋本町の旧宅は、内蔵（家の中から出入りできる蔵）のある住宅が一棟、別に三棟続きの土蔵、それに広い庭のあるお家でした。

かごは内蔵の二階に保存されていました。およそ140年の歳月が、かごのあちこちを痛めていましたが、修復は十分可能。かごが、町屋から出てくることは珍しく、乗り物の歴史にとっても貴重な資料です。

喜んでお受けすることにしました。

児玉家旧宅

仁保島村は安芸郡に属し、堀越・向洋・渕崎・日宇那・丹那・楠那・大河・本浦・宇品島※・似島・金輪島の11の集落に分かれていた。※宇品島は昭和4年3月広島市に合併。

かごの歴史

かごが歴史に登場するのは、安土桃山時代1594（文禄3）年、豊臣秀吉が「乗輿の制度」という法律を定めた時です。五大老（家康、利家、景勝、輝元、隆景）、公家、五山の長老、出世之衆という特定の人たちだけに乗ることを許しました。

この時代のかごは『乗り物』とよばれ、内外に塗り物や金具の装飾がほどこされた豪華な造りで、かつぐ人も4～6人という大きなものでした。

徳川幕府も乗輿の制度を引き継ぎましたが、家光が2度目に制定した武家諸法度（1635・寛永12年）の中で、年齢50歳以上、病人に限って、一般の人々にも『かご』の利用を許しました。

つまり、江戸時代のかごは、限られた人だけが乗る『乗り物』と、一般の人たちが利用できる『かご』の二種類に分かれていきました。

『かご』は、木・竹・紙・畳表・ござというどこでも手に入れられる材料を用い、装飾も簡素なものでした。かつぎ手は二人です。

目的地までの移動はひたすら歩くという時代に、新しい交通手段の登場。かごは人々の注目を集めました。

幕府は1674（延宝2）年、一般の人たちが町かご営業（今でいうハイヤー）をする許可を出しました。

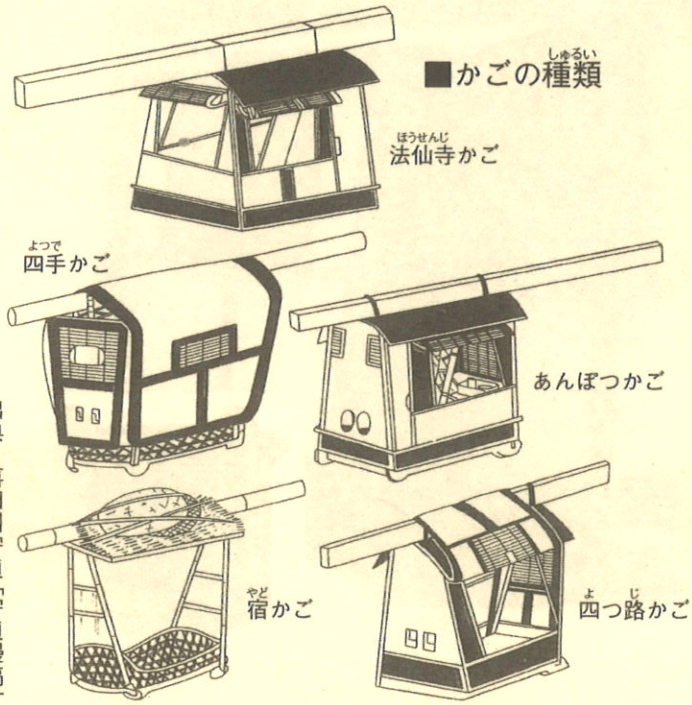
利用できる人の制限は残されたままでしたが、実態はお金さえ払えば誰でも自由に乗ることができました。

しかし、運賃は一里（約4km）の区間で400文。別にチップが必要でした。大工さんの日当が600文でしたから、かごに乗ることは大変な出費でぜいたくなことでした。

かご屋に使いを走らせ迎えに来させる、そんな面倒なことをするよりいっそ自家用のかごを持つ、という人たちがいました。

その職業は、位の高いお坊さん、大きな商店経営者、大地主といった人たちでした。かごをかつぐ人が二人必要でしたからこのような限られた裕福な人々しか持つことができませんでした。

数少ないかごが安芸郡仁保島村にあったことは大変な驚きです。近世交通史・生活文化史の上でも貴重な資料であることは間違いありません。



出典　喜田川守貞「守貞漫稿」

かごの造り

本体（箱）の大きさは、巾98cm・奥行60cm・高さ90cm、かつぎ棒の長さは2m30cm、重さは14kgです。

底の浅い箱と屋根の部分を薄い板状の柱でつなげたものに竹を添わして、屋根の上からかつぐようになっています。軽い桐の木がかつぎ棒として使われています。

乗り降りは、左右両方にある引戸を引いて、どちら側でもできるようになっています。また、乗った人の履物を下げる金具が後ろ外側についています。

屋根は薄い杉板をゆるやかに丸くはり、その上に和紙を貼り、柿しぶを塗って雨の日でもぬれない工夫がしてあります。

内部は、板の背もたれにひじかけが両方につき、前側にはたばこ盆を置く台が備え付けられています。

すだれが四方に巡らしてあり、中から外の様子を見ることが出来ます。このかごの形は、江戸時代中頃に完成した"あんぽつ"型といわれるもので明治時代の始め頃までつくられました。

ためになる話

速度・速いもので時速約6km、普通は約4km。

運賃・目的地（距離）や利用する時刻をもとに、お客とかご屋が交渉して決めました。チップは別料金でした。

江戸・京都間をかご屋がリレーする協定を結び、お客を運びました。4日と半日かかりました。

嫁入りかごは婚礼の時に花嫁が嫁ぎ先まで乗るかごで、裕福な農家や商店経営者が結婚に重みをもたせる意味で使いました。嫁入り道具のひとつです。

【おまけ】生家のざしきから乗って、嫁ぎ先のざしきで降りる。途中で花嫁の顔は見られない、箱状のかごに乗って嫁いだところから、大事にしまって人に見せないように大切に育てた娘のことを『箱入り娘』というようになりました。

〈参考文献〉「賀籠」櫻井芳明・法政大学出版局
「中・近世の陸上用具こし・車・かごについて」中村太郎・創元社
「日本大百科全書5」小学館

にほしま第18号・平成25年(2013年)8月25日／編集発行人　生活資料館・ハワイ移民資料館 仁保島村 館長 川﨑　壽／印刷所　レタープレス株式会社／無断複製、転載を禁ず